

文学教材の研究―魯迅『故郷』(中学校三年)の言語表現―

荻原 桂子

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻
北九州市八幡西区自由ヶ丘二一(千八〇七―八五八六)
(二〇一五年十一月十二日受付、二〇一五年十二月十七日受理)

はじめに

魯迅は、一八八一年九月、中国浙江省紹興で、地主官僚の家に生まれた。本名は周樹人で字を豫才といった。父は周鳳儀といい、科挙受験資格試験の合格者で秀才であったが、科挙第一段階合格者である挙人にはなれなかった。母は魯瑞といい、当時の女性としては珍しく読み書きができ、清末に纏足反対運動が起きると纏足をほどき断髪するなど開明的な女性だった。弟には、文学者であり日本文化研究者でもある周作人、生物学者の周建人がいる。父の科挙に関する賄賂が発覚して祖父が下獄、その後父も重病で亡くなり、周家は急速に没落した。

一八歳で南京にあった鉱務鉄道学堂に入学し四年間を過ごす。その間、ハスクリー著『進化と倫理』を厳復が訳した『天演論』などを読み、進化論をはじめ新しい思想にふれる。一九〇二年、国費留学生として日本に七年余り留学した。国の人々を救うために医学を専攻したが、同時に西洋の文学や哲学にも心惹かれた。

一九〇四年、仙台医学専門学校に最初の中国人留学生として入

学し、学校側も彼を無試験かつ学費免除で厚遇した。当時、医学校では講義用の幻灯機で日露戦争に関する時事的幻灯画を見せていた。母国の人々の屈辱的な姿を映し出したニュースを見て、二年で医学専門学校を退学する。はじめての小説集である『呐喊』(一九二三年)の「自序」には、当時のことを次のように述べている。

あのことがあつて以来、私は、医学などは肝要でない、と考
えるようになった。愚弱な国民は、たとい体格がよく、どん
なに頑強であつても、せいぜいくだらぬ見せしめの材料と、
その見物人になるだけだ。病氣したり死んだりする人間がた
とい多かろうと、そんなことは不幸とまではいえぬのだ。む
しろわれわれの最初に果すべき任務は、かれらの精神を改造
することだ。そして、精神の改造に役立つものといえは、当
時の私の考えでは、むしろ文芸が第一だった。そこで文芸運
動をおこす気になった。(一九二二年十二月三日、北京に
おいて魯迅するす。竹内好訳『魯迅文集1』)

その後、東京で雑誌の出版事業を始め、教訓的な内容の散文を文語体で書いた。これらの散文は、後に『墓』（原題は『墳』）と名付けられた散文集に収められている。また、周作人が編集した二巻からなる『域外小説集』のために三編の外国小説を翻訳した。帰国後は、杭州の師範学堂で化学・生物の教師として過ごし、辛亥革命（一九一一年）勃発後には紹興の師範学堂校長となった。一九一二年中華民国政府が成立すると、蔡元培の招きで南京に行き教育部の事務官の職位に就き、臨時政府の移転にともない北京に移り住んだ。北京での最初の数年間は、もっぱら中国文学の典籍研究に没頭することで忙しい日々を送っていた。

しかし、魯迅の文学への野望は、文学革命によって再び蘇った。日本留学時代の友人であった錢玄同から要望され、雑誌『新青年』の一九一八年五月号に、小説『狂人日記』を発表した。

一九一九年には、『孔乙己』と『薬』の二つの小説を『新青年』に寄稿した。藤井省三氏は、『狂人日記』がその文体と内容は衝撃的だが技法的には未熟だったのに対して、その一年後に発表された『孔乙己』は、構成といい文体といい見事な出来映えを示している」と指摘する。

一九二〇年秋から一九二六年夏まで、北京大学ついで北京女子師範大学の講師をつとめ、中国小説史を講じる一方、『祝福』をはじめとする短編小説や散文詩を執筆発表した。しかし、一九二

五年には北京女子師範大学で学園紛争が起こり、学生処分に対反する魯迅は処分派の論者と大論争を展開、これを機に雑文（論争文）に力を注ぐようになる。

一九二六年三月、日本の内政干渉に強硬な態度を採るよう政府に抗議する学生・市民に対し、軍隊が発砲して四七名が死亡する「三・一八事件」が起きると、魯迅は政府を激しく批判した。これに対し軍閥政府は魯迅を含め五〇数名を指名手配者としたため、魯迅は日本人やドイツ人が経営する病院に潜伏を余儀なくされた。避難生活は五月には終わるが、その年八月北京を離れ、福建省にある厦門大学の中国文学の教授として迎えられた。一九二七年一月には、北京女子師範大学の教え子であった許広平のいる広州に移り、中山大学教授の職に就いたが、ここでも反共クーデターが起こり、中山大学の職を辞した。

一九二七年、許とともに広州を脱出し、上海に着いた。一九二九年九月には長男海嬰が生まれる。一九三〇年代の魯迅は、国民党政府によって、その作品をししばし発禁処分された反体制文学生者であった。魯迅は、一九三六年一月一九日上海にて、持病の喘息の発作で急逝する。

『故郷』は、一九二一年五月号『新青年』第九卷第一号に発表、『呐喊』に所収された。日本においては一九二七年に武者小路実篤の主筆する月刊誌『大調和』一〇月号に掲載されたが、訳者は不明だという²⁾。以下のような訳者による『故郷』の翻訳がある。

- ・ 佐藤春夫訳『中央公論』一月号（中央公論社、一九三二年）
 - ・ 井上紅梅訳『魯迅全集』（改造社、一九三二年）
 - ・ 竹内好訳『阿Q正伝・狂人日記―他十二篇 呐喊』（岩波文庫、一九五五年）↓『魯迅選集』（岩波書店、一九五六年）
 - ・ 高橋和巳訳『世界の文学47魯迅』（中央公論社、一九六七年）↓『呐喊』（中公文庫、一九七三年）
 - ・ 増田渉訳『魯迅作品集 鑄劍』（ゆまに書房、一九七五年）
 - ・ 竹内好訳『魯迅文集』（筑摩書房、一九七六年）↓『魯迅文集1』（ちくま文庫、一九九一年）
 - ・ 駒田信二訳『魯迅作品集』（講談社文庫、一九七九年）↓『阿Q正伝・藤野先生』（講談社文芸文庫、一九九八年）
 - ・ 藤井省三訳『故郷／阿Q正伝』（光文社古典新訳文庫、二〇〇九年）
- 『故郷』の教科書への掲載は、教育出版（一九五六年）、光村図書（一九六六年）、三省堂（一九六九年）、学校図書、東京書籍（一九七二年）で、日中国交回復の一九七二年以後、中学校三年のすべての国語教科書に収録されたことになる。一九七八年の教科書改訂にあたって、竹内好訳『魯迅文集』（筑摩書房一九七六年）収録の翻訳文が五社の教科書訳文底本として用いられている³。『故郷』は国語教科書で日本人全員が読んだことになり、魯迅は「外国人でありながらほとんど国民作家に近い存在になっ

ている」⁴のである。

日本と中国で読み継がれている『故郷』は、日中両国民間の対話と交流のよりどころとなる作品である。現今の日本で義務教育最後の学年に、魯迅『故郷』を読む意味は深い⁵。

一、帰郷途中の「私」

『故郷』は、「私」という一人称で語られ、現実と過去の回想が交錯する物語である。「私」は、現実の〈語り手〉であると同時に過去の回想の〈語り手〉でもある。中里見敬氏は「三つの時間と二重の物語行為という構造に起因する、作中人物による語りの代行という現象こそが、「故郷」のテクストを特徴づけているのである」⁶と指摘する。「三つの時間」とは、「私」が帰郷の様子を語り出す現在の時間と帰郷した当時の時間と三十年前の閩土との過去の時間を示し、「二重の物語行為」とは作品全体の〈語り手〉としての「私」と登場人物としての「私」の二重構造を示している。こうした、幾重にも重ね合わされた時間と語りの重層性が、作品に余韻と寂寥感を持たせることに成功している。

「私」ととつての「故郷」とは、如何なるものであったのか。作品冒頭から「私」の「故郷」に対する想いを、その言語表現から読み解くことから始める。

きびしい寒さのなかを、二千里のはてから、別れて二十年

にもなる故郷へ、私は帰った。

もう真冬の候であった。そのうえ故郷へ近づくとつれて、空模様はあやしくなり、冷い風がヒューヒュー音を立てて、船のなかまで吹きこんできた。苦のすき間から外をうかがうと、鉛色の空の下、わびしい村々が、いささかの活気もなく、あちこちに横たわっていた。おぼえず寂寥の感が胸にこみあげた。

ああ、これが二十年来、片時も忘れることのなかった故郷であろうか。

藤井省三氏は、「魯迅はチリコフの「田舎町」を模倣して「故郷」を制作したといえよう」と述べると同時に、「故郷の風景の屈折した構成こそは魯迅自身の創作であった」と指摘する⁷。「私」に「寂寥の感」が生じるのは、「私」にとつての帰郷は「故郷に別れを告げに来た」のであり、「住みなれた古い家に別れ、なじみ深い故郷をあとにして、私がいま暮らしを立てている異郷の地へ引つ越さねばならない」からである。ここでは、〈語り手〉の視点が「私」の想いと一体化していることがわかる。田中実氏は『故郷』は一人称小説、「私」という主人公は「私」という一人称の〈語り手〉であると同時に「迅ちゃん」と三人称で呼ばれ、作中に実体として登場もしている⁸と述べ、「私」の思惑が一元的に表出する仕組みになっている⁹と指摘するように、〈語

り手〉が「私」の想いにびたりと添うようにして語ることで、より一層「寂寥の感」が増幅する仕組みになっている。作品冒頭の「寂寥の感」は重要であり、「故郷」への思いは、結末で明らかにその質を変えることになる。この「私」の「故郷」への想いの変化こそが、『故郷』という教材の文学的価値である。『故郷』という作品は、末尾の「希望」という「私」の想いに全ての想いを収斂させていくところに、渾身のエネルギーが注がれている。

田辺洵一氏は「確かにこの作品の場合、その時代背景に一九二〇年前後の中国があり、また、紹興にあつた屋敷の明け渡しといった魯迅の伝記的事実が題材となつてはいる。しかし、文学作品の読みとしては、そのようなことに関する知識がなければ読めないというようには考えるべきではない」と述べ、「読むとは、こゝとばをモデルとなつた事実に戻元することではない」¹⁰と明言する。また、佐藤洋一氏は、『故郷』の小説の特質として「人間のイメージの変化、それによつて語られている作者の思想、社会の中の人間のテーマ、細密な特徴的な描写等にあり、末尾の断片的「説明」や「私」の心境・語を人生論的に重視するのは、魯迅の小説の読み方からも、近代小説の読み方からもズレることになる」¹¹と指摘する。文学教材の読みのあり方に留意しながら、作品の構造やこゝとばの仕組みを読み解くことで、『故郷』の文学教材としての可能性を考察していく。

二、「閨土」について

「私」の「故郷」への「寂寥の感」は、現実の「わが家」を目の前にして一層濃厚なものとなる。そこに、一片のすばらしい光景が浮び上がってくる。三十年近くも昔の記憶である「閨土」の記憶である。

このとき突然、私の脳裡に不思議な画面がくりひろげられた——紺碧の空に金色の丸い月がかかっている。その下は海辺の砂地で、見わたすかぎり緑の西瓜がうわっている。そのまん中に十一、二歳の少年が、銀の首輪をつるし、鉄の刺叉を手にして立っている。そして一匹の「獠」^{チヤイ}を目がけて、ヤツとばかり突く。すると「獠」^{チヤイ}は、ひらりと身をかわして、かれの股をくぐって逃げてしまう。

「電光のように一挙によみがえ」った記憶に、「私」はやつと「美しい故郷」を見出すのである。この光景は、三十年前にあつても「私」が実際にみたものではなく、「閨土」が語ってくれた「塀の外」の世界への「私」の心象世界である。心象世界は三十年の時間磨滅することもなく、「私」の脳裡で研ぎ澄まされ、さらに輝きを増していたのである。

つやのいい丸顔で、小さな毛織りの帽子をかぶり、キラキ

ラ光る銀の首輪をはめていた。それは父親の溺愛ぶりを示すもので、どうか息子が死なないようにと神仏に願をかけて、その首輪でつなぎとめてあるのだ。

少年の日の「閨土」は「つやのいい丸顔」で、父親にも溺愛されていた幸福な人間であった。「私」の脳裡に焼き付いている「閨土」のイメージは、「閨土」が語る夢のような世界とともに昇華していったのである。

ああ、閨土の心は神秘の宝庫で、私の遊び仲間とは大ちがいだ。

「閨土」そのものが実体のあるものというよりも、「閨土の心」として心象化した「神秘の宝庫」となつて、「私」の心に深く刻まれた。「私」の脳裡に「神秘の宝庫」として蘇つた「閨土」の心は、「私」の「故郷」そのものであつたのである。

帰郷した直後の「私」には蘇らなかつた「故郷」の美しさが、三十年前の「閨土」との思い出に触れると「私はやつと美しい故郷を見た思いがした」のである。現実の故郷は悄然とした「私」の慰めとはならなかつたが、「閨土の心」は「私」の心に再び輝きを与えたのであつた。「神秘の宝庫」は「紺碧の空に金色の丸い月がかかっている」なかで記憶のなかの「閨土」として鮮やか

に蘇るのである。

しかし、現実の「閩土」との再会は、「私」に故郷の現実を突きつけるのである。輝かしい「閩土」の消滅が、『故郷』という作品の精神である。「私」の「故郷」喪失の実体について、田中実氏は「憧れの夢の世界に棲む輝かしい少年閩土こそ、「故郷」そのものであり、その姿の消滅こそ、「私」にとつての真の「故郷」喪失であったのである」¹²と述べている。「私」は、もう一人の人物「楊おばさん」によつて、「故郷」の現実を目の当たりにすることになる。

三、変貌した「楊おばさん」について

『故郷』の重要な人物として「楊おばさん」が登場する。昔は「豆腐屋小町」呼ばれたほどの美人だった女性が、三十年の時間のなかで見事に変貌を遂げていた。

びつくりして頭をあげてみると、私の前には、頬骨の出た、唇のうすい、五十がらみの女が立っていた。両手を腰にあてがい、スカートをはかないズボン姿で足を開いて立ったところは、まるで製図用の脚の細いコンパスそっくりだった。

「製図用の脚の細いコンパス」という比喻は、人間の身体表現としては斬新である。

そういえば子どものころ、筋むかひの豆腐屋に、楊おばさんという人が一日じゅう坐っていて、「豆腐屋小町」と呼ばれていたつけ。しかし、その人なら白粉を塗っていたし、頬骨もこんなに出ていないし、唇もこんなにうすくはなかったはずだ。

「楊おばさん」に対する「私」の感情は、作品掉尾に表現されている「また他の人のように、やけをおこして野放図に走る生活を共にする」人物の象徴として描かれている。「楊おばさん」を見て、「私」が何度も「ドキンとした」のは、今まで知っている人間のどの種類にも属さない新種の人間を見たからである。一方的にまくし立てる「五十がらみの女」に年下の「私」は「どぎまぎ」し、「返事のしようがないので」、「口を閉じたまま立っていた」のである。

四、変貌した「閩土」について

「楊おばさん」の激変に圧倒された「私」は、次に更なる「故郷」の客に出会わなければならなかった。「私」が「思わずアツと声が出かかっ」て「いそいで立ちあがって迎えた」のは、驚くほど変貌を遂げた「閩土」であった。

背丈は倍ほどになり、昔のつやのいい丸顔は、いまでは黄ばんだ色に変わり、しかも深い皺がたたまれていた。眼も、かれの父親がそうであつたように、まわりが赤くはれている。私は知っている。海辺で耕作するものは、一日じゅう潮風に吹かれるせいで、よくこうなる。頭には古ぼけた毛織りの帽子、身には薄手の綿入れ一枚、全身ぶるぶるふるえている。紙包みと長いぎせるを手にさげている。その手も、私の記憶にある血色のいい、まるまるした手ではなく、太い、筋くれ立つた、しかもひび割れた、松の幹のような手である。

変貌したのは姿だけでなく、二人の関係性でもあつた。《ああ閨ちゃん——よく来たね……》とまでは声に出せたが、それに続く言葉は出なかった。「閨土」は「つつ立つたままだった。喜びと寂しさの色が顔にあらわれた。唇が動いたが、声にはならなかった」のである。そして、やつと出た言葉は《旦那さま……》であつた。田辺洵一氏は「旦那さま」という制度のことばは、「私」の制度としての存在をあきらかにした。「私」は、そのことばに圧倒されて、ことばを喪つた。「私」は、閨土と同様、あらがいがたく状況の支配を受けていたのである。¹³と指摘している。「私」は、ことばを失つた自分に対して内省の視点をもつことになる。「故郷」に対する「寂寥の感」は実体としての「故郷」喪失に加えて、心象の「故郷」喪失によつて、さらに深まるのである。

かれが出ていったあと、母と私とはかれの境遇を思つため息をついた。子だくさん、凶作、重い税金、兵隊、匪賊、役人、地主、みんなよつてたかつてかれをいじめて、デクノボーみたいな人間にしてしまったのだ。母は、持つていかぬ品物はみんなくれてやろう、好きなように選ばせよう、と私に言った。

「閨土」は、作品掉尾で語られる「打ちひしがれて心が麻痺する生活を共にする」人間に変貌してしまつたのである。「デクノボーのような人間」という比喻も、「楊おばさん」の「製図用の脚の細いコンパス」同様、変貌した人間像として象徴的に描きだされている。

五、離郷途中の「私」

「私」の「楊おばさん」や「閨土」への幻滅は、さらに「私」自身への幻滅に発展する。二人への認識の深化が、自己の相対化へと繋がつていくのである。

私も、私の母も、はつと胸をつかれた。そして話がまた閨土のことにもどつた。母はこう語つた。例の豆腐屋小町の楊おばさんは、私の家で片づけがはじまつてから、毎日かなら

ずやって来たが、おととい、灰の山から椀や皿を十個あまり掘り出した。あれこれ議論の末、それは閩土が埋めておいたにちがいない、灰を運ぶとき、いつしよに持ち帰れるから、という結論になった。楊おばさんは、この発見を手柄顔に、「犬じらし」（これは私たちのところで鶏を飼うのに使う。木の板に柵を取りつけた道具で、なかに食べものを入れておくと、鶏は首をのばして啄むことができるが、犬にはできないので、見てじれるだけである）をつかんで飛ぶように走り去った。纏足用の底の高い靴で、よくも思うほど早かったそのうだ。

この灰のなかに椀や皿をかくした犯人が誰であるかということ、中国の教材資料では、その政治的な背景から重要な問題になつてきた。藤井省三氏は「人民共和国の成立と毛沢東時代の始まり」とよって楊二嫂の階級制が議論的になると、「故郷」の犯人をめぐる論争が生じるのであつた¹⁴と指摘している。日本の教材研究での「真犯人」への読まれ方と中国での教材研究での読まれ方の違いは、両国間の『故郷』という教材で生徒に何を教えるのかという問題に発展する。

日本の国語教科書では、「真犯人」が誰であるかは、ことばの仕組みから読み取らせることになる。「楊おばさん」と「閩土」の変貌を作品の「私」の内省にどう関わらせていくかが重要にな

る。「私」は帰郷によって、「寂寥の感」から「希望」の内省を實現するのである。

古い家はますます遠くなり、故郷の山や水もますます遠くなる。だが名残り惜しい気はしない。自分のまわりに眼に見えぬ高い壁があつて、そのなかに自分だけ取り残されたように、気がめいるだけである。西瓜畑の銀の首輪の小英雄のおまかげは、もとは鮮明このうえなかつたのが、今では急にぼんやりしてしまつた。これもたまたまなく悲しい。

「希望」の實現には、心象の「故郷」に依存するのではなく、現実の「故郷」に目覚める自己否定をも懼れない自己認識が必然であつた。

私も横になつて、船の底に水のぶつかる音をききながら、いま自分は、自分の道を歩いているとわかつた。思えば私と閩土との距離はまったく遠くなつたが、若い世代はいまでも心がかよい合い、げんに宏児は水生のことを慕っている。せめてかれらだけは、私とちがつて、たがいに隔絶することのないように……とはいつても、かれらがひとつ心でいたいがないために、私のように、むだの積みかさねで魂をすりへらす生活を共にすることは願わない。また閩土のように、打ちひし

がれて心が麻痺する生活を共にすることも願わない。また他の人のように、やけをおこして野放図に走る生活を共にすることも願わない。希望をいえば、かれらは新しい生活をもたなくてはならない。私たちの経験しなかつた新しい生活を。

『故郷』の〈語り手〉である「私」は、離郷する船のなかで、「故郷」の現実を受け入れる「私」を確認している。

希望という考えがうかんだので、私はどきつとした。たしか閩土が香炉と燭台を所望したとき、私は相変らずの偶像崇拜だ、いつになったら忘れるつもりかと、心ひそかにかれのことを笑つたものだが、いま私のいう希望も、やはり手製の偶像に過ぎぬのではないか。ただかれの望むものはすぐ手に入り、私の望むものは手に入りくいだけだ。

『故郷』は「故郷」への帰郷・離郷を通して、社会・国家のあり方を問題にした作品である。生まれ育つた「故郷」を回想する文学作品は数多く書かれているが、このように広い視野と複雑な背景をもつた作品は、短編ではあまり見られない。

『故郷』が描かれた当時、中国は辛亥革命が成功を収め、民主共和国を出現させたが、その実は上がらなかつた。富国強兵を現実させて列強の侵略を止めることもできず、民政の困窮は革命に

よつて救われるどころか、清朝末期よりもかえつて増していた。『故郷』に描かれている現実の社会は、矛盾や欠陥に満ちている。作品に描かれた状況をとらえ、その状況と真摯に向き合う人間の姿の描写を味わいながら、作者が作品に込めた思いを読み取ることは、田辺洵一氏の「読むとは、ことばをモデルとなつた事実に戻元することではない」という指摘や、佐藤洋一氏の「末尾の断片的「説明」や「私」の心境・語を人生論的に重視するのは、魯迅の小説の読み方からも、近代小説の読み方からもズレることになる」という指摘に対峙するが、作品理解には重要であると考え

る。帰郷の船の中で「私」は故郷への未練を捨て、「宏児」と「水生」のような「新しい世代」に期待を寄せる。しかし、それは「閩土」と同じ「偶像崇拜」であることに気づかされる。「私」は他者に期待をかけてばかりで何もしていなかつた自分に初めて気づくのである。これが最終場面での大きな「心の転換」である。

まどろみかけた私の眼に、海辺の広い緑の砂地がうかんでくる。その上の紺碧の空には、金色の丸い月がかかつている。思うに希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。

この部分には、「私」が「他者」へ期待するのではなく、希望の実現に向かつて歩き始めようという強い意志が表現されている。「地上の道」は、現実の「故郷」との出会いによつてもたらされたもので、徹底的な自己相対化による自己認識さらに自己否定のなかでこそ見出されたものなのである。

したがって、「他者への希望」から「自己への希望」への大きな転換に気付くことが作品『故郷』を理解するうえで、重要なポイントとなる。

おわりに

魯迅は、中国近代文学の父であり、同時に国民精神の変革を生涯の課題とした作家である。

彼の死後、ほどなくして二〇巻からなる『魯迅全集』が出版された。

また、日本では仙台医専時代の魯迅を描いた作品に太宰治の『惜別』（一九四五年）がある。この「惜別」ということばは、仙台医専時代に、魯迅に個別添削を授けるなど何かと気を配っていた恩師、藤野厳九郎が最後に魯迅に渡した写真の裏に書いたことばである。その藤野との関係は、小説『藤野先生』に以下のように描かれている。

《私の講義、ノートが取れますか?》とかれは訊ねた。

《どうにか》

《見せてごらん》

私は筆記したノートをさし出した。かれは受け取つて、一両日して返してくれた。そして、今後は毎週持つてきて見せるようにと言つた。持ち帰つて開いてみて、私はびつくりした。同時にある種の困惑と感激に襲われた。私のノートは、はじめから終りまで、全部朱筆で添削してあり、たくさんの抜けたところを書き加えただけでなく、文法の誤りまでことごとく訂正してあつた。このことがかれの担任の骨学、血管学、神経学の授業全部にわたつてつづけられた。—中略—

だがなぜか私は、今でもよくかれのことを思い出す。わが師と仰ぐ人のなかで、かれはもつとも私を感激させ、もつとも私を励ましてくれたひとりだ。私はよく考える。かれが私に熱烈な期待をかけ、辛抱よく教えてくれたこと、それは小さくいえば中国のためである。中国に新しい医学の生れることを期待したのだ。大きくいえば學術のためである。新しい医学が中国に伝わることを期待したのだ。私の眼から見て、また私の心において、かれは偉大な人格である。その姓名を知る人がよし少いにせよ。（「藤野先生」竹内好訳『魯迅文集』）

日本との関わりの深い魯迅ではあるが、国語教科書に採録されているのは、もちろん本国中国の方が早い。藤井省三氏は「中国語教科書に至っては単行本に先んじて『故郷』を教材として収録し、知識階級予備軍の情念と理論とを養っていく。そして一九四九年に共産党が中国を統一したのちには、『故郷』は階級闘争の視点から解釈され、社会主義の思想政治教育を担う国語教材として中学校で教えられていくのである」¹⁵と指摘している。日本の中学校で国語教材として読まれる『故郷』と、中国の中学校で国語教材として読まれる『故郷』には、国家という制度の視点の相違がある。中国では『故郷』は一九二〇年代以来中学校の国語教科書の超安定教材であると同時に「国家建設を語るイデオロギー小説」だったのだ。

現在、中国で魯迅の『故郷』は日本より読まれないといわれ、国語教科書改訂によって魯迅の作品が削除されて話題となった¹⁶。日本の国語教科書で定番となっている『故郷』の教材研究は、外国文学としての言語表現の分析にも有意義な教材である。

義務教育を締めくくる中学校での文学作品の授業が目指すべきことは、卒業後も、自力で文学作品を読めるようになることである。そのためには、作品を教える観点ではなく、作品で教える観点が必要である。たとえ一人でも、その方法で読んでいけば深い解釈ができるという文学作品の読み方をきちんと教えることが重要である。文学教材の読み方を理解し、習熟する過程を通して、

生徒たちは少しずつ自らの力で文学作品を読むことができるようになる。そして、文学作品の本当の面白さ、読書の本当の楽しさを味わうことができるようになることで、他者への想像力を豊かにすることができる³と考える。

*魯迅年譜に関しては、藤井省三『魯迅事典』三省堂、小山三郎他編『魯迅 海外の中国人研究者が語った人間像』明石書店、井波律子『奇人と異才の中国人』岩波新書、藤井省三『魯迅——東アジアに生きる文学』岩波新書を参照した。

*魯迅『故郷』の原文は、竹内好訳『魯迅文集1』（ちくま文庫）に拠った。

註

1 藤井省三「解説」『故郷／阿Q正伝』光文社古典新訳文庫、二〇〇九年四月、三〇〇頁。

2 中西一彦「故郷」（魯迅）の授業実践史、『文学の授業づくりハンドブック第4巻——授業実践史を踏まえて——中・高等学校編』溪水社、二〇一〇年三月、九九頁。

3 藤井省三氏は竹内好の翻訳に関して、「土着化の最たるもの」と述べ、「魯迅の原文と比べて竹内訳が数倍の句点。」を使って、本来は数行にわたる長文を多くの短文に切断している

- 点」を問題にし、「竹内氏は魯迅文学を戦後日本社会に土着化させるのに成功し、中学国語教科書が魯迅を国民文学並みに扱うようになりました」と指摘している。藤井省三「解説」『故郷／阿Q正伝』光文社古典新訳文庫、二〇〇九年四月、三三八頁。
- 4 藤井省三「魯迅の読まれ方」『魯迅事典』三省堂、二〇〇二年四月、二九一頁。
- 5 佐藤洋一氏は、「中学三年生という時期に文学教材（小説）の一編として、『故郷』（魯迅・竹内好訳）は社会・歴史と人間、国家と人間の関係、また、人間の表現の意味等に気づかせるのに優れた教材価値をもつ作品として評価され、様々な研究や実践記録等が積み重ねられてきたことは周知の通りである」と述べている（三七頁）。「文学教材解釈への一視点——『故郷』（魯迅）を例に——」『日本文学』三八巻、一九八九年一月、四九頁。
- 6 中里見敬「魯迅『傷逝』に至る回想形式の軌跡」『中国小説の物語論的研究』汲古書院、一九九六年、七〇頁。
- 7 藤井省三「知識階級の『故郷』」『魯迅「故郷」の読書史』創文社、一九九七年一月、一三頁、一五頁。
- 8 田中実「虚妄の希望・虚妄の絶望——『故郷』のへことばの仕組み」『文学の力×教材の力 中学校編三年』教育出版、二〇〇一年六月、一六頁。
- 9 田中実、同掲書、一七頁。
- 10 田辺洵一「魯迅『故郷』における人間追求——反転する人間理解」『文学の力×教材の力 中学校編三年』教育出版、二〇〇一年六月、二六頁。
- 11 佐藤洋一氏は「私」（知識人型）は、いわゆる「心境小説」的主人公ではなくて、作品世界（閩土や楊おばさんの人間像）の迫真性・存在感を保証するための表現の視点としての役割をもつ」と述べている。前掲書、四九頁。
- 12 田中実 前掲書、二三頁。
- 13 田辺洵一 前掲書、三六頁。
- 14 藤井省三「思想政治教育としての『故郷』」『魯迅「故郷」の読書史』前掲書、一六二頁。藤井氏は「閩土無罪の根拠として引いた「不要なもののみな閩土にやる……」という母の言葉は、以後閩土＝犯人否定の根拠として現在に至るまで繰り返し用いられている」と指摘している。一六五頁。
- 15 藤井省三「はじめに」『魯迅「故郷」の読書史』前掲書、三四頁。
- 16 「魯迅の『故郷』 中国では日本より読まれない？」北京魯迅博物館元副館長の陳漱滄氏は、昨年「教材における魯迅」という書籍を出版した。陳氏は「魯迅の作品が教材から撤退したというような表現は大きだが、減少傾向にあることは事実」と語る。人民網日本語版二〇一四年一月五日。

**A study on Japanese language art education
-A verbal expression of “The hometown”
by Luxun**

Keiko OGIHARA

Course of Principal Human Sciences, Department of Human

Development, Faculty of Humanities,

Kyushu Women's University

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyusyu-shi

807-8586, Japan

No English abstract